日本語動詞の相と結果可能に関する一考察

張　威

§1．はじめに

日本語の可能表現には、結果可能表現という一類がある。

いわゆる<結果可能表現>は、つまり動作主がある状態変化を実現しようとして動作・行為を行なう場合、動作・行為がなされた結果、主体的または客観的条件によって、動作主に意図された目的、即ちある事態またはある種の状態変化が動作主の思い通りに実現することができるかできないかを表わす可能表現である。

結果可能表現は、動作の結果が注目されていることと、<状態変化>が取り上げられるところにその特徴がある。また、結果可能表現は従来認められている可能のマーカー[1]を用いずに可能の意味を表わす表現であるので、無標の可能表現と称することができる。

筆者は張1993a[2]において、日本語の述語動詞の文法機能と結果可能の意味を実現することとの関連性を調べてみた。この考察により、日本語の述語動詞のル形は、従来記述されてきた文法機能のほかに、ある事態が未実現の状態から実現の状態に変わるという変化を表わす側面を有している、ということが明らかとなった。

日本語動詞のル形が上述した<変化>を表わす機能を有していることは、結果可能表現が無標で可能の意味を実現する上で極めて重大な意味をもつものと考えられる。そのため、筆者は張1993b[3]において日本語動詞の態（voice)と結果可能との関わりを調べ、有標の可能表現と無標の可能表現との間にみられる文法的性格上の相違点をさぐりながら、日本語動詞の態の表現形式とみなされている

「（ら）れる」・「（さ）せる」のル形に＜変化＞を表わす機能があるかどうかを検証してみた。

その結果、日本語動詞のル形には、ある事態の「未実現→実現」の＜変化＞を表わす機能がある、という考え方は普遍性を有するものであるということが、動詞のヴォイスの面において支持されることとなり、つまり、「（ら）れる」・「（さ）せる」のル形にも＜変化＞を表わす機能の備わっていることが明らかとなった[4]。

もっとも、「（ら）れる」「（さ）せる」を調べるだけでは、まだ「普遍性を有する」ということの説得性に欠けるきらいがある。そこで、他の文法的意味[5]を表わす助動詞、補助動詞のル形についても考察を加える必要のあることは一目瞭然である。

したがって、本稿では、日本語動詞の相(aspect)を表わす表現形式と結果可能の意味を実現することとの関わりの上から、無標の可能表現と有標の可能表現との相違点を調べると同時に、述語動詞のアスペクトの側面から、動的事象を表わす日本語動詞のル形には、＜変化＞を表わす機能が備わっている、という考え方の妥当性を検証してみる。

§２．本稿で取り上げる日本語動詞の相の表現形式

本稿はアスペクトの側面から「動的事象を表わす日本語動詞のル形には、＜変化＞を表わす機能が備わっている」という考え方の妥当性を検証するものであるので、日本語動詞の相を表わす表現形式のうちの動詞型のル形をもつものを考察の対象とする。

したがって、「～たところだ」「～ているところだ」「～（し）そうだ」「～たばかりだ」などのような動詞型でないものは、たとえ日本語動詞の相を表わす形式として認められている[6]ものの、本稿の扱う対象ではない。

アスペクトについてのとらえ方は、研究者によって一様ではないが、本稿では、動詞の表わすうごきの過程のどの部分を問題にするかという文法的な意味を表わすものを述語動詞のアスペクトとする。

日本語動詞のアスペクトを表わす形式でかつ動詞型のル形をもつものは、主として次の二類が挙げられる。

A類：「～ている」「～てある」「～ておく」「～ていく」「～てくる」「～てしまう」など。

B類：「～はじめる」「～つづける」「～おわる」など。

そのうち、A類は「て」フォームと補助動詞との組み合わせからつくられる形式であり、B類は前置する動詞と共に複合動詞をつくる補助動詞である。本稿で取り上げるアスペクトの表現形式はこの二類に限る。

§3．結果可能表現とA類の表現形式との関わり

3-1 「～ている」・「～てある」の場合

「～ている」は日本語動詞の相を表わす形式として様々な立場から研究されてきた。吉川1976[7]は、この形式は前置する動詞の性格とsituation などによって、具体的に次のようなことがらを表わすことができるとしている。

(1) 子供たちは外で遊んでいる。（動作・作用の継続）

(2) 教室の窓が開いている。（動作・作用の結果の状態）

(3) 夜空に高い塔がそびえている。（単なる状態）

(4) あの人はたくさんの小説を書いている。（経験）

(5) 日曜日になると、父はいつもゴルフに行っている。（くりかえし）

そして、「～てある」は、吉川1976では「動作の終わった後の結果を表わす」ものとしてとらえられている。そのうえ、吉川は「～てある」の表わす意味を次の五つに分けている[8]。

A．対象の位置が変化した結果の状態を表わす。

(6) 炉に炭火が入れてある。

B．対象が変化した結果の状態を表わす。

(7) 私の家は人に貸してある。

C．動作が終わったことを表わす。

(8) アパートを建てるということは十か月前に発表してある。

D．放任を表わす。

(9) その仕事はかれに任せてある。

E．準備のためにした動作を表わす。

(10)ちゃんと手が打ってある。

「～ている」と「～てある」の表わす意味とその文法上の性格からすれば、この二つの表現形式は原則的に結果可能表現の述語を担うことが不可能である、と判断される。

何故かといえば、結果可能の定義からも明らかであるように、状態変化を取り上げることは結果可能表現になるための基本条件である。

既に前述したように、動的事象を表わす動詞のル形は状態変化を表わす機能を有している。そして動的事象を表わす動詞がル形の＜変化＞を表わす機能を働かしてはじめて結果可能表現の述語を担うことができるのである。

動的事象を表わす動詞のうち、意味的・形態的・統語的にそれと対応する他動詞を有する自動詞（以下これを有対自動詞[9]とする）が結果可能表現の述語動詞としてもっとも適格である[10]。しかし、たとえこのような有対自動詞の場合であっても、「～ている」または「～てある」の形式を用いるとなると、もとより表現の表わしている＜状態変化＞が、「変化が終わった後の状態が持続している」などのような、ある種の＜状態＞に変わってしまい、この原因で、「～ている」または「～てある」を用いた有対自動詞は、結果可能の意味を表わすことができなくなるのである。

(11) a.ブレーキをかければ、車が止まる。
　　×b.ブレーキをかければ、車が止まっている。
　　×c.ブレーキをかければ、車が止まってある。

(12) a.もう少しまけてくれれば、買うよ。
　　×b.もう少しまけてくれれば、買っているよ。
　　×c.もう少しまけてくれれば、買ってあるよ。

(11)と(12)はいずれも aが適格な表現であるのに対し、 b、cは非文である。

そして、aについていえば、仮に「車が止まる」ことと「（お客さんが品物を）買う」ことがそれぞれ「ブレーキをかける」・「（値段を）まける」動作の目的であるとすれば、(11)a、(12)aは結果可能表現であると判断することができる。

(11)aについていえば、この表現は「ブレーキをかける」という手段をとれば、君（話しの相手であると同時に「ブレーキをかける」動作の動作主でもある）の希望している「車が止まる」ということを実現することができる、という意味を表わしていると解釈することができる。

言うまでもなく、同様な解釈は (12)aについても適用される。

しかし、(11)b、c と(12)b、c の場合は、述語動詞である「止まる」と「買う」が「～ている」または「～てある」の形式で用いられているので、動詞の表わしている事象の性質が、状態変化（事態の成立）としてとらえられるものから、とらえられないものに変わっている。これによって、述語動詞が表わしている内容は構文の要求に合致することができなくなるのである。状態変化を表わす述語を要求する構文に、変化が終わった後の状態が持続していることを表わす述語を当てはめようとすると、表現内部の合理性が破壊されてしまい、その表現が非文になるのは当然なことである。

3-2 「～ておく」・「～ていく」・「～てくる」・「～てしまう」の場合

「～ておく」・「～ていく」・「～てくる」・「～てしまう」は、いずれもある種のうごきを表わすものである。それらの表わしているうごきには、未実現の局面から実現の局面への変化がとらえられるというところに共通点がみられる。これはそれらの形式が「～ている」・「～てある」と区別される大きな相違点である。

まず「～ておく」について考えてみよう。

「～ておく」は①対象を変化させて、その結果の状態を持続させること、②対象に働きかけないで、そのままの状態を持続させることを表わす。この二つの用法の意味上の共通点といえば、「ある状態を持続させる」ということである。

「ある状態を持続させる」ことは「～ている」・「～てある」の場合の「ある状態が持続している」のと相対応しており、後者は状態性の事柄であるのに対し

て、前者は動的事象なのである。このことは、動的事象を表わす動詞が「～ておく」を用いても、その動詞の表わす事柄の性質が依然としてうごきそのものであり、うごきの持続している状態あるいはうごきが終わった後の結果が持続している状態などではない、ということからも説明される。

そこで、「～ておく」を用いた後でも、動詞の表わしている事柄に「未実現→実現」の＜変化＞がとらえられるという性格は相変らず保持している、と考えられる。仮にそれは事実であるとすれば、このような場合、「未実現→実現」の＜変化＞を表わしているのは、「動詞の連用形＋ておく」であるというよりも、「～ておく」のル形がその＜変化＞を表わすために機能しているものとみた方がより妥当なのであろう。

(13)参考書を用意しておく。

(14)そのままにしておく。

(13)と(14)はそれぞれ「～ておく」の用法①と用法②の例である。仮に上で述べたように、「～ておく」のル形が状態変化を表わす機能を有していることが事実であれば、必要な条件が揃えば、この二つの表現は結果可能表現になることが可能である。

次の例で検証してみよう。

(15)参考書は、使いたい時に知らせてくれれば、用意しておくよ。

(16)そのままにしてくれといえば、そのままにしておくよ。

(15)では、相手に参考書を用意してもらうために「（参考書を使いたいという情報を相手の人に）知らせる」という状況を想定すれば、「（相手が参考書を）用意しておく」という事態を実現させることは「知らせる」という動作の動作主がもとより意図していた目的であるとみなすことができる。このように考えてみると、(15)は「使いたい時に知らせる」という方法・手段を用いれば、君（「知らせる」の動作主）の意図していた目的を実現させることができるのよ、という

結果可能の意味を表わしている、ということになる。

同じような解釈は、(16)についても適用される。つまり、(16)は「そのままにしてくれ」という指示をしてくれれば、「（こっちが）そのままにしておく」という事態が相手の希望通りに実現することができる、という意味を表わすものと考えられる。

では、「～てくる」と「～ていく」の場合はどうであろう。

「～てくる」と「～ていく」はそれぞれ、「話し手または主人公に近付くうごきと、話し手または主人公からとうのくうごきを表わす形式である」[11]。この二つの形式はいずれも空間的な移動を表わす用法とアスペクトの意味を表わす用法を有している。

(17)こざるが、走り出てくる。

(18)バスは、再び坂道をくねりながら登っていく。

(19)どのような赤ちゃんが生れてくるだろうか。

(20)新生児の数はしだいに減っていく。

(17)～(20)のうち、(17)(18)はある方向性をもつうごきを表わし、いわば空間的な移動を表わす用法であり、(19)(20)は出現または消めつの過程を表わしているので、アスペクトの意味を表わす用法である。

空間的な移動を表わす場合は、表現の中で取り扱われている事柄が所詮うごきに属するものであるので、「来る」・「行く」の動詞と同じように、「～てくる」・「～ていく」もル形を用いて＜変化＞を表わすことができる。そして、(21)(22)で示すように、この用法の「～てくる」・「～ていく」は結果可能を表わす場合がある[12]。

(21)君が望めば、変わりに行ってくるよ。

(22)電話で言ってくれれば、すぐ必要なものをそちらへ持っていく。

一方、アスペクトの意味を表わす場合は、「～てくる」・「～ていく」が動

作・作用・変化などのうごきというよりも、そのようなうごきのある過程を表わしている。このような場合、「～てくる」・「～ていく」のル形が＜変化＞を表わし得るか否かは、それの表わしている事象がうごきとしてとらえられるかどうかによって決められる。

吉川1976は、「～てくる」と「～ていく」の表わしているアスペクトの意味を下の表で示すように、(3)を除いて相対応している、としている[13]。

「してくる」は次のことをあらわす	「していく」は次のことをあらわす
(1) 出現の過程 例　ことばは生活の中から生れてきます。 (2) 変化の過程 例　だんだんおなかがすいてきました。 (3) 過程（動作・作用）のはじまり 例　そのうちに、雨がふってきました。 (4) ある時点までの継続 例　おたがいにはげまし合ってきた、この年月。	(1) 消めつの過程 例　心細く思いながら、きえていく白鳥のむれを見送りました。 (2) 変化の過程 例　けれども、病気は、ますます重くなっていきました。 (4) ある時点からの継続 例　うまく宣伝して、新しい観光地として発展させていけばいい……

アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」は、具体的に上の表で示したような諸過程を表わしているが、そこで観察される一つの重要な共通点といえば、即ちどの過程を表わす場合においても、うごきが徐々に実現するという意味素が抽出できる、ということである。

例えば「生れてくる」と「消えていく」は、単なる「出現」または「消めつ」

の現象がこれから成立する、ということを意味するものではなく、「生れていない状態」から徐々に「生れた状態」へ、または「消えていない状態」から徐々に「消えた状態」へと変化する過程を表わすものである。

「動作・作用の始まり」を表わす「～てくる」の場合もそうである。つまり、動作・作用が「まだ始まらない状態」から徐々に「始まった状態」になる過程を表わしているのである。

もっとも明確に「うごきが徐々に実現する」という性格が現われているのは、「変化の過程」を表わす場合である。このことは、「変化の過程」を表わす場合に、「～てくる」と「～ていく」は通常「だんだん」、「ますます」、「日増しに」、「少しずつ」などのような「徐々に」という状況を含意する副詞と呼応して用いられる、という事実からも裏付けられる。

勿論、「継続の過程」を表わす場合も例外ではない。これはうごきが徐々に実現しながら継続するということを表わしているのであり、決して単なる継続を表わすものではなかろう。

このように、「～てくる」と「～ていく」は前置する動詞の性格またはそれが用いられている表現の文脈などにより、上記した①～④の過程を表わすとされているが、どの過程の場合においても、その根底には「うごきが徐々に実現する」という基本的な意味が潜在しているのである。

一般には、「出現」・「消めつ」・「変化」・「開始」などは、いずれも「動的事象」とみなすことができる。それらは動的事象としてとらえられるからには、その事象において、必然的に「未実現→実現」の＜変化＞が存在しているはずである。

ところが、アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」が動的事象を表わす時には、主としてうごきの「徐々に実現する」という側面を取り上げている。それが故に、うごきの「未実現→実現」の＜変化＞の側面は通常、表現の焦点から外れてしまうようである。すると、アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」は、表現の趣旨が状態変化を表わすことではないということで、結果可能表現の述語形式として用いられない、ということになるのである。

アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」が結果可能表現の述語形式と

してふさわしくないとする理由については、主として次の二点が指摘できる。

第一、アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」の表現意図が、うごきの過程を表わすことにあり、そのうごきは一体動作主の希望しているものであるかどうかについてはむしろ無関心である。そのため、表現で取り上げられているうごきは、往々にして動作主の努力によって実現しようとする人為的なうごきとしてとらえることは極めて困難である。

第二、アスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」が述語動詞に後置して用いられると、表現の焦点は通常述語動詞の表わす動作・作用または変化などのうごきの過程と「徐々にうごきが実現する」という意味に当てられている。それによって、「事態の成立」という状態変化は表現の目的ではあり得ないのである。結果可能の意味が実現する基本条件からすれば、表現の趣旨が事態の成立またはある種の状態変化でないものは、結果可能表現から排除されることになっているのである。

結果可能表現がアスペクトを表わす「～てくる」・「～ていく」の形式を拒むということは、次のような例からも検証される。

(23)a.　アクセルを踏めば、エンジンがかかる。

b.？アクセルを踏めば、エンジンがかかってくる。

(24)a.　こんなにひどいけがだと、手術をしても、助からないよ。

b.？こんなにひどいけがだと、手術をしても、助かってこないよ。

(23)aと(24)a はいずれも結果可能表現であると考えられる。それに対して、(23)bと(24)b は、「？」が示してあるように、適格性の極めて低い不自然な表現である。

「～ば～（ル形）」構文と「～ても～（ナイ）」構文は、結果可能の意味が形成する論理を端的に表わす構文形式である[14]。この二つの構文形式は基本的に「ある条件の下で事態が成立するか否か」を表わすものと考えられる。だから、構文で求められている述語は事態が成立するかしないかを意味するものである、ということは明らかである。

そこで、(23)bと(24)b の不自然さは、事態が徐々に実現しながら成立する過程を表わす「～てくる」・「～ていく」が、事態が成立するかしないかを表わす述語を要求する「～ば～（ル形）」構文と「～ても～（ナイ）」構文には適合しない、というところに由来するものであると説明することができるであろう。

引き続き「～てしまう」の場合を調べてみよう。

「～てしまう」は、アスペクト的には、うごきの過程の終わりを表わす形式である。この形式はアスペクト的な意味を表わすほかに、ムード的な意味の表出にも深く関わっている。

吉川1976は「～てしまう」のはたらきとして次の五つが考えられるとしている[15]。

①ある過程をもつ動作がおしまいまで行なわれることを表わす。

②積極的に動作に取り組み、これをかたづけることを表わす。

③ある動作・作用が行なわれた結果の取り返しがつかないという気持ちを表わす。

④動作が無意志的に行なわれることを表わす。

⑤不都合なこと、期待に反したことが行なわれることを表わす。

吉川は①をアスペクト的なもの、④⑤をムード的なもの、②③を両者の中間的なものである、と指摘している[16]。

では、上に記した「～てしまう」の五つの用法は、結果可能との間にどのような関わりがあるのであろうか。

①は「おしまいまで動作が行なわれる」ことを表わすので、動的事象がそれの表わす対象であることは明らかである。このことから、この場合の「～てしまう」のル形には状態変化を表わす機能が備わっている、という予測はできるということになる。

(25)全部食べてしまう。

(26)何もかも話してしまう。

(25)(26)の表わしている事象には、いずれも「未実現→実現」の変化がとらえ

られる。このことは次の二例によって裏付けられる。

(27)全部食べてしまえといえば、全部食べてしまうよ。
(28)ここ（警察）から出してくれれば、何もかも話してしまうよ。

(27)と(28)はいずれも結果可能を表わしているものと認められる。そのうち、(27)は「全部食べてしまえ」という指示あるいは命令を出せば、君の希望している「（私がこれを）全部食べてしまう」という事態が（君の思い通りに）実現できるという意味を表わし、(28)は「私が何もかも話してしまう」ということを実現しようとすれば、「ここ（警察）から出してくれる」という行動をしなさい、という意味を表わしていると考えられる。

くりかえし述べてきたように、状態変化を取り上げることは結果可能表現のもっとも基本的な条件である。逆にいえば、結果可能を表わす述語形式であると認められたからには、当然なことで、その述語形式の表わす事象が状態変化としてとらえられるに決まっているのである。

それに対して、「～てしまう」の②～⑤の用法の場合はどうであろう。

ここでまず、それらの用法について、吉川1976で挙げられている例を二例ずつ引いておこう[17]。

②「積極的に動作に取り組み、これをかたづけることを表わす」
(29)そんなもの、盲腸みたいに切っちゃうと楽なのよ。
(30)このいずみをうずめてしまうんだ。

③「ある動作・作用が行なわれた結果の取り返しがつかないという気持ちを表わす」
(31)ところが、この小屋にも、いることができなくなってしまいました。
(32)気が変になっちゃうよ。

④「動作が無意志的に行なわれることを表わす」

(33)人々はおどろいてしまった。

(34)光子、裂くような激しい声をあげて泣き伏してしまう。

⑤「不都合なこと、期待に反したことが行なわれることを表わす」

(35)車が雪の中にはまって、動かなくなってしまうからである。

(36)タバコを火に近づけた瞬間、蛾がとびこんで来て火を消してしまう。

これらの用法の「～てしまう」が動詞を前置させて用いられた場合、用法①と同じように、それらの表わしている事柄には事態の「未実現→実現」の<変化>がとらえられる。しかし、ここで指摘しておかなければならないのは、これらの用法で用いられた「～てしまう」は、状態変化を取り上げる述語形式ではあるが、結果可能表現の述語形式にはなり得ないということである。

状態変化を取り上げるものでなければ、結果可能表現となることはあり得ない。そして、状態変化を取り上げるものであれば、必ず結果可能表現であるというわけでもない。つまり、状態変化を取り上げることは、結果可能表現の基本条件ではあるが、唯一の条件ではないということである。そのほかにはまだいくつかの制約が加えられている[18]のである。例えば「表現の中で取り上げた状態変化は、動作主の意図した目的、つまり動作主が何らかの努力によって、実現しようとするものでなければならない」というのはそのうちの一つである。この制約は述語動詞がル形（またはその否定型）を用いて結果可能を表わしているか否かを弁別する重要な基準の一つである。

「～てしまう」の②～⑤の用法について考えてみると、それらの用法で用いられた「～てしまう」は、第一、状態変化を取り上げているととらえられても、それは表現の趣旨あるいは表現の目的であると考えられない；第二、その状態変化を動作主の意図したものとしてとらえることは極めて困難である。

用法②についていえば、これは①の場合との間に大きな類似性がみられる。それは、この場合の「～てしまう」はアスペクト的な性格が比較的濃厚であるからである。吉川1976は、この用法②を「一連の動作の最後の段階が行なわれる」ということを表わすものとした上で、「一連の動作の最後の段階が行なわれるとい

うことは、大きな過程のおわりの部分が行なわれるということであり、……一連の動作の最後の段階を行なう、ということから、積極的に取り組み、これをかたづける、という意味が出てくるのである。」[19] と説明している。

このようなとらえ方は、アスペクト的な立場によるものであり、ものの本質をついた見解である。

結果可能に関連して考えてみると、「～てしまう」の用法②は、上に記したようにアスペクト的な観点からとらえることができるが、しかし実際には、この用法の「～てしまう」が用いられた表現の趣旨は、アスペクト的な意味を表わすことではないようである。つまり、この用法の背景として、アスペクト的に解釈され得ることは事実ではあるが、実際の表現において、「～てしまう」②は果たしてアスペクト的な意味を表わすために機能しているかといえば、必ずしもそうではないようである。それは、むしろ「積極的に動作に取り組み、これをかたづける」という意味を実現するための形式である、と考えた方がより妥当であるかもしれない。

したがって、「～てしまう」は用法②で表現の中で用いられると、「積極的に動作に取り組み、これをかたづける」という意味を表示する機能だけが明確かつ鮮明に具現化し、その他の文法的意味を表わす機能はそのために潜在化してしまうと考えられよう。そこで、この用法の「～てしまう」は、状態変化を取り上げることが趣旨である表現をつくらないし、たとえ状態変化を何らかの形で取り上げたとしても、その状態変化は動作主の意図したものとしてはとらえ難いのである。

仮に「～てしまう」②の場合には、もしかすれば、結果可能表現とは何らかの形で関わりをもつ余地が極めて少ないのにもかかわらず、多少疑問が残っているというならば、「～てしまう」③～⑤の場合となると、ほとんどその可能性が存在しないと考えてよかろう。

何故かといえば、吉川1976のいうように、④と⑤はムード的なものであり、そして③は①（アスペクト的なもの）と④⑤（ムード的なもの）の中間にあるものといっても、後者の方により近いものなのである。このことは③の表わす意味の性質からもうかがえる。

③「ある動作・作用が行なわれた結果の取り返しがつかないという気持ちを表わす。」

このように、ムード的な意味を表わすために使われた「～てしまう」が話し手の気持ちまたは態度を表出することを目的としている。そのような場合、状態変化を表わすことが表現の趣旨ではないということで、「～てしまう」のル形の状態変化を表わす機能は作動しないことになる。

「～てしまう」④⑤の用法が結果可能とは無縁であるということは、上で述べたような理由のほかに、この二つの用法の「～てしまう」の表わす意味が結果可能表現の規定には正反対している、ということからも裏付けられる。

④の表わしている「動作が無意志的に行なわれること」と⑤の表わしている「不都合なこと、期待に反したことが行なわれること」は、結果可能表現の「表現で取り扱われている事態の成立または状態変化は動作主の意図したものでなければならない」という制約を破っている。

「動作主の意図したもの」というのは、即ち動作主がその状態変化の実現を希望しているだけでなく、その上、それを実現させるために努力しようとする意志のあることを含意しているのである。「無意志的に行なわれる」のような状態変化の実現の仕方や、「不都合なこと、期待に反したこと」のような状態変化の中味は、結果可能の論理に反するものであり、許容される余地のないものであって、このような用法で用いられた「～てしまう」は結果可能表現をつくらない、ということは明々白々である。

§4．結果可能表現とB類のアスペクトの表現形式

B類のアスペクトの表現形式は複合動詞をつくる補助動詞である。これを更に下位分類をすれば、次の二種類に分けられる。

一つは時間的な相を表わすものであり、

開始：～はじめる、など。

継続：～つづける、など。

終了：～おわる、など。

今一つは、空間的な相を表わすものである[20]。

上と下への動きの方向：～あげる、～あがる、～おろす、～くだす、など。

内と外、周囲への方向：～こむ、～こめる、～だす、～まわす、など。

ある目標に向かっての動き：～かける、～かかる、～つける、など。

程度、密度、強さ、完成など：～ぬく、～きる、～こむ、～とおす、など。

時間的な相を表わす補助動詞であろうと、空間的な相を表わす補助動詞であろうと、それらは本来いずれも動詞であった。そして、他の動詞と組み合わせて複合動詞をつくった場合、それらと組み合わせる動詞の表わす事象の性質[21]が変わらない、ということが観察される。

例えば、「手紙を書く」にしても「手紙を書きはじめる」、「手紙を書きつづける」、「手紙を書きおわる」にしても、「書く」という動作を取り上げて表わすという点においては相共通しているのである。

また、動作主の希望を表わすには、「手紙を書きたい」と対応して、「手紙を書きはじめたい」、「手紙を書きつづけたい」、「手紙を書きおわりたい」などの形式があり、相手に命令する意を表わすには、「手紙を書け」と対応して、「手紙を書きはじめろ」、「手紙を書きつづけろ」、「手紙をかきおえろ[22]」などの形式がある。

このように、アスペクトを表わすB類の形式を用いることにより、前置する動詞の表わす事象が動作性のものから状態性のものに変わったり、あるいは状態性のものから動作性のものに変わったりするようなことはないのである。

これはB類のアスペクトの形式とA類のアスペクトの形式との間にみられる一つの大きな相違点である[23]。B類のアスペクトの形式とA類のアスペクトの形式のもう一つの相違点は、後者がアスペクトのほかに、ムード的意味またはもくろみ的な意味に深く関わっている場合がある[24]のに対して、前者のほうにはそのような側面がない、というところに現われている。より明確にいえば、B類のアスペクトの形式が他の動詞と組み合わせて複合動詞をつくった場合、その複合動詞は語彙的にアスペクト的な意味が添えられたほかには、動的事象を表わす動詞としての性格はまったく変らないのである。このことは、B類のアスペクトの形式が結果可能表現の述語形式として用いられる可能性を高くする要素であると

考えられる。

A類のアスペクトの形式とB類のアスペクトの形式の性質上にみられるそのような相違から、前者よりも後者のほうがル形を用いて事態の<未実現→実現>の変化を表わす可能性が大きい、ということを予測することはできるであろう。

もとより、アスペクトは動的述語の表わすうごきに関わるカテゴリーであるので、原則的には動的事象の諸相を表わすものである。したがって、B類のアスペクトの形式と組み合わせて複合動詞をつくる動詞は、静的状態を表わす状態性動詞よりも、動作・作用・変化などのようなうごきを表わす動作性動詞のほうが圧倒的に多いわけである。前述したように、B類のアスペクトの形式はそれと組み合わせる動詞の性質を変えないという特徴をもっている。それが故に、B類のアスペクトの形式と組み合わせてつくられた複合動詞は、動的事象を表わすものが圧倒的に多いということになるのである。

このように考えてみると、B類のアスペクトの形式と組み合わせてつくられた複合動詞が動的事象を表わすものである場合は、他の動作性動詞と同じように、そのル形には<変化>を表わす機能が備わっている、という結論が得られることになる。

また、その他の条件も満たされた場合には、B類のアスペクトの形式は、ル形を用いて結果可能を表わすことができる、ということにもなるのである。

次に「～（動詞の命令形）といえば、～（動詞＋ル形）よ」の構文を用いて、上の仮説を検証してみる。

「～（動詞の命令形）といえば、～（動詞＋ル形）よ」の構文には、次のようなテクストを設定しておく。

つまり、話しの相手が話し手に、あることをしてもらいたいと思って、ある指示または命令を発した。それで、話し手が相手に、「～（動詞の命令形）といえば、（動詞＋ル形）よ」という構文形式で発話したとする。

この場合、「～（動詞の命令形）といえば、～（動詞＋ル形）よ」の構文は次のような意味を表わしていると解釈することができる。

つまり、指示または命令を発する動作の動作主（即ち表現の話しの相手）が、「その指示または命令を受ける人（即ち表現の話し手）が自分の言う通りにす

る」という事態の成立することを期待しており、そのことを実現させようとして指示なり命令を発したのである。そうすると、「～（動詞の命令形）といえば、～（動詞＋ル形）よ」の構文は、君が「（私が）～する」ということを実現しようとすれば、「～しろ」という指示または命令をしなさい、立場を換えていえば、「～しろ」という指示または命令を私にしないと、君の実現しようとしている「（私が）～する」という事態は成立することができないのよ、という意味を表わしていると考えられるのである。

言うまでもなく、上に解釈した意味は、結果可能の意味である。

次は、「～（動詞の命令形）といえば、～（動詞＋ル形）よ」の構文をものさしとして用い、上に記したような意味分析の論理に基づき、B類のアスペクトの形式が結果可能表現の述語形式として用いられ得るかどうかを調べてみる。

(37)やりはじめろといえば、やりはじめるよ。
(38)やりつつけろといえば、やりつづけるよ。
(39)今日中にやりおえろといえば、今日中にやりおえるよ。
(40)見上げろといえば、見上げるよ。
(41)立ち上がれといえば、立ち上がるよ。
(42)袋から取り出せといえば、袋から取りだすよ。
(43)最後までやりぬきなさいといえば、最後までやりぬくよ。

(37)～(43)の例から分かるように、B類のアスペクトの形式が結果可能を表わすことが可能である。

§5．まとめ

本稿では日本語動詞の相を表わす動詞型の形式を、「て」フォームと補助動詞との組み合わせからつくられるA類のものと、他の動詞の連用形に後続して複合動詞をつくる補助動詞であるB類のものとに分類した上、この二類のアスペクトの形式を対象に、それらの形式の表わすアスペクトの意味と結果可能の意味との

関わりを分析しながら、

1）それらのアスペクトの形式がル形で用いられた場合、それの表わしている事柄には、ある事態が未実現の状態から実現の状態への変化がとらえられるかどうか。

2）そのような変化がとらえられる場合は、その形式は結果可能表現の述語形式として用いられるかどうか。

の二点を調べてみた。そして、次の表で示すような結果が得られた。

日本語の述語動詞の相を表わす形式のル形と結果可能との関わり

	形　式	＜変化＞との関わり	結果可能との関わり
A類	～ている	×	×
	～てある	×	×
	～ておく	○	○
	～てくる	○	△
	～ていく	○	△
	～てしまう	○	△
B	～はじめる	○	○
	～つづける	○	○
	～おわる	○	○

類	～あげる	○	○
	～あがる	○	○
	～だす	○	○
	～ぬく	○	○

（「○」はその形式のどの用法の場合でも＜変化＞あるいは＜結果可能＞と関わりをもつことを表わし、「×」はその形式のどの用法の場合でもそのような関わりをもたないことを表わし、「△」はその形式の一部分の用法しかそのような関わりをもたないことを表わす。）

上の調査結果により、次のようなことが明らかとなった。

一つは、日本語の動詞型のアスペクトの表現形式は、状態性の事柄を表わす「～ている」と「～てある」のほかに、いずれも動的事象を取り上げることがあり、そして、動的事象を表わす場合には、それらの表わす事柄には、事態の＜未実現→実現＞の変化がとらえられる。

今一つは、それらのアスペクトの表現形式は、それぞれの意味領域をもっており、それらの形式の表わす意味が結果可能表現で取り上げられている事態（以下これを略して「コト」と称す）の内部におさまるか否かは、それらの形式が結果可能表現の述語形式になれるか否かの決め手である。

つまり、アスペクトの形式の表わす意味がコトの内部におさまらない場合、その形式の表わすアスペクト的、ムード的、あるいはもくろみ的な意味が結果可能の意味（厳密にいえば、ル形の表わす＜変化＞の意味）と衝突することによって、その形式は、結果可能の意味を実現する条件に適合しないということで、結果可能表現の述語形式になることはあり得ないが、しかし、アスペクトの形式の表わす意味がコトの内部におさまる場合、またはその意味がコトの内部におさま

らなくても、結果可能の意味との間に衝突が生じないような場合には、アスペクトの表現形式も結果可能表現の述語形式として用いることがあり得るということである。

また、本稿の考察の結果から、次の二点が指摘できると考えられる。

①動的事象を表わす動詞型のアスペクトの形式のル形にも＜状態変化＞を表わす機能が備わっている。

この事実によって、張1993a の提案した「動的事象を表わす述語動詞のル形は、従来記述されてきた文法機能のほかに、ある事態が未実現の状態から実現の状態に変わる、というような＜変化＞を表わす側面を有している」という考え方は妥当性のあるものである、ということが裏付けられた。

②無標の可能表現は有標の可能表現と比べれば、ヴォイスの面だけでなく、アスペクトの面においても、相互承接の上で許容度が比較的高いという特徴をもっている[25]。

これは文法的性格の上からみられる無標の可能表現と有標の可能表現との大きな相違点である。

しかし、何故にこのような相違が存在し得るのであろうか。これは結果可能表現の研究で、是が非でも究明しなければならない問題である。本稿では扱うことができなかったが、今後の課題とする。

1993.9

注

[1] 例えば、A．動詞の未然形＋可能の接尾辞れる・られる、B．五段活用動詞の語尾-u→-e-ru の形を取るもの（いわゆる可能動詞）、C．サ変動詞の語幹＋できる、D．動詞の連体形＋ことができる、E．動詞の連用形＋うる

（える）。

2) 張　威1993a「述語動詞のル形の文法機能――結果可能表現との関連から」『世界の日本語教育』第３号（国際交流基金）。

3) 張　威1993b「日本語動詞の態と結果可能に関する一考察」『ことばの科学』第６号（名古屋大学言語文化部言語文化研究委員会）

4) 張　威1993b 参照。

5) 例えば、アスペクト・ムード・もくろみなどの意味がそうである。

6) 例えば、高橋太郎1976「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（むぎ書房刊）は、「～たところ」「～ているところ」「～そうだ」「～たばかりだ」のようなものを日本語動詞のすがた(aspect)の形式として認めている。

7) 吉川武時1976「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（むぎ書房刊）、p.164 。

8) 同上書p.257 。

9) 「有対自動詞」は早津恵美子1987「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』７（京都大学言語学研究会）の命名による。

10) 詳しくは、張　威1991「結果可能表現―中日語対象研究の立場から―」（名古屋大学大学院文学研究科修士論文）を参照されたい。

11) 高橋太郎1976「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（むぎ書房刊）、 p.136～138 。

12) (15)(16)と同じような論理で(21)(22)を説明することができるので、ここでは詳述を省くこととする。

13) 吉川1976 p.218。

14) このことについては、張　威1992「統語上に見られる結果可能表現の成立条件」『日本語学』（明治書院）（近刊）には詳しい論述がある。

15) 吉川1976 p.228。

16) 吉川1976 p.232。

17) 吉川1976 p.234～253 。

18) 結果可能の意味を実現するためには、少なくとも次の四つの条件が必要であ

る。

a．結果可能表現で取り扱われているのは、動作・作用ではなく、事態の成立または状態変化でなければならない。

b．その事態または状態変化は、動作主の意図したもの（即ち動作主の動作によって、実現しようとする目的）でなければならない。

c．そのような事態または状態変化を表わすことは、表現の趣旨でなければならない。

d．たとえ、動作主の意図した事態または状態変化を取り上げた表現であっても、その事態または状態変化が動作主の思い通りに実現された場合は、結果可能の意味を表わすことにはならない。

19) 吉川1976 p.234～235 。

20) このようなとらえ方は、寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』（くろしお出版）にもみられる。

21) 即ち、動的事象であるか、それとも状態性の事象であるという性質を指す。

22) 「～おわる」は命令形を用いない形式である。

23) A類の「～ている」「～てある」を用いると、動詞の表わす事象の性質が変化する。

24) 例えば、「～てしまう」の用法②～⑤はそうである。

25) ヴォイスの面に関する考察は、張　威1993b を参照されたい。

（ちょう　い　日本言語文化）